研究の現状と教材化

―『万葉集』山部赤人「不盡山」歌を通して―

吉　村　　　誠

Study and Teaching with
"The poem of Hujisan Maountain written by Yamabe no Akahito in Manyousyu"

YOSHIMURA Makoto

(Received September 26, 2014)

一　はじめに

昨今の授業方法は、従来の知識偏重、詰め込み教育への批判から、学習者主体の授業へと変革が求められている。また学力観も「考える力」を養うことやコミニュケーション能力の育成が重視され、講義中心の教師主導型から、支援型へと変更を余儀なくされている。そのために古典授業においても大きな見直しが迫られている。従来の現代語訳、文法学習中心から、生徒自らによる内容理解重視型への転換である。確かに従来の古典文法を中心とした古文読解だけでは、学習者も興味を示さなこともあり、古典学習において効果的な方法であるとは言えない。しかし須藤敬氏も指摘されているように[1]、古典への理解は、基礎知識がなければ「考える」ことは出来ず、古典解釈が恣意的なものになってしまい、古典本来の持っている内容や主題が十分に理解されないまま、その本質が見過ごされてしまうおそれがある。古典学習には様々な意義が唱えられているが、その一つに当時の文化の把握がある。このことが現代の我々の文化との関連性を理解し、また興味の中心となるべきものである。しかしこのことを学習者主体の「学び」とするには、教師側が教材研究を十分に行っていないと、古典と現代が切り離されまま現代的感覚で古典を理解するだけで終わり、伝統文化に対する理解が十分なされないだけでなく、古典の本質を引き出すことは出来ない危険性がある。

一方で、古典文学の研究水準と学校現場での教育との乖離が言われてから久しい[2]。しかしこの溝はいっこうに埋まる気配はない。それは学校現場をあまり知らない大学研究者と、雑用に忙殺されて十分な教材研究が出来ない現場教師との間の物理的な隔絶であるとも言える。

もちろん「専門的な理解を中学生に求めることはできないし、またその必要もない[3]」とい

1　須藤敬「古文における教材研究ということ」『古文教育の考察と実践―教育と研究のフィールドをつないでー』おうふう2014.5

2　夙に「文学・語学」(全国大学国語国文学会) 185巻2006.6が「学会の未来に向けて」というテーマでこのことを論じ、また最近では同じ「文学・語学」209号が「日本文学・日本語学と教育」というテーマを組んで、このことを問題としている。また拙稿「古典文学研究と古典教育一教師教育の基盤として一」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第22号　2006.9で専門研究と教育のつながりを論じた

3　『中学校国語３　教師用指導書　教材研究篇（下巻）11学図　国語922』

うのが現場教師にとっては一般常識であろう。「専門的知識」を教室で振りかざすことは基礎知識もない学習者にとってかえって混乱を招くどころか教材に対する興味も失ってしまう。

しかし学習者主体の授業展開を行おうとすれば、今以上に教師は教材の本質をとらえる必要がある。そうでないと指導するにあたっても応用がきかなくなり、「ねらい」も含めて恣意的解釈の中で行われてしまうことになるからである。

国文学研究の目的は言うまでもなく、古典をどのように理解するかということと作品の価値付けを目的としているが、結局の所享受の範囲を抜け出ることはない。しかし恣意的解釈を出来るだけ避け、当時の文化理解を基盤として「読み」の追求を行う点で恣意的理解とは区別される。

そこで本稿では、主に中学校における古典教材として複数の出版社の教科書に採択されている『万葉集』山部赤人の「富士山」歌について、私見も交えて現研究段階をまとめた上で、教師教育としての教育学部での演習授業の実践例を紹介しながら教材化の方法を検討し、中学校での教材研究と指導のあり方を考えてみたい。

対象とする歌は、以下のものである（本文は、漢字仮名まじりの現代表記を用いる)。

山部宿祢赤人望不盡山歌一首并短歌

天地の　別れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を　天の原　振り放け見れば　渡る日の　影も隠らひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくぞ　雪は降りける　語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　富士の高嶺は（巻三・三一七）

反歌

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける（同・三一八）

二　研究の現状から見る「不盡山」歌の意味と意義

当該歌は、反歌のみ独立して『新古今集』に採録されてもおり、古来有名な名歌として評されてきた歌である。「伝え合う言葉　中学国語３」（教育出版　2012.2）ではこの反歌のみを掲載し、次のように教科書本文で解説されている。

富士山は昔から高く尊い山、聖なる山として人々にあがめられていました。

この歌は、作者が旅の途中で富士山を見たときの歌です。田子の浦を通って急に視界が開けたところに出てみると、今まで近くの山に隠れていた富士山が目に飛び込んできました。真っ白に雪が降り積もり神々しくそびえ立つ富士山の姿を仰ぎ見た感動がよまれています。その白さ、美しさを「真白にそ」と表したのです。

この解説は正しくもあるが､必ずしも現在の研究段階の成果が反映されているわけでもなく、言わば一昔前のとらえ方である。

また教師用指導書[4]において、この単元の解説に「そこには古代人らしく山霊への畏敬とでも言った、厳粛な感動さえあった。すぐれた叙景歌であると同時に秀麗な富士への畏敬、礼讃の念が高められ（下略)」とある。

この二例の解説で、いずれも「属目」「叙景」というとらえ方を基本にしている所が問題となる。そこで研究の現状を通して、作品の言葉に即しながら考えてみたい。ただ研究史をまとめることが目的ではないので、個々の論に対しては詳しくは言及しない。また引用しなかった

---

[4] 「中学校国語３　教師用指導書　教材研究篇（下巻）学校図書株式会社

論文もある。そして通常の論文とは異なり理解しやすいように問題点を箇条書きにして、それぞれ論じる。

従来この歌を「叙景歌」としてとらえてきたことに誤りはない。しかし「叙景」ということに真っ向から疑問を呈され、その見方の成因から説き起こし、詳しく論じられたのは梶川信行氏である。氏は「叙景」ととらえることへの徹底的な見直しを図り、研究史を通して叙景と見なされてきた評価の方法、叙景ということの定義などを通して、この歌の非叙景性を論じられる[5]。しかしそれが実景描写であるかどうか、叙景の定義などを論じても水掛け論に陥る。それよりも特に長歌を構造的に見なければ、風景描写部分の本質を見極めることが出来ないであろう。この歌の構造を考えるに当たっては、同様な構造になっている国見歌と言われる性格の歌が重要となる。そこでその関連から触れていくことにする。

⑴　題詞「望」とあることで「国見歌」との関連性を考える

題詞には、「不盡山」を「望」と表記していることに注意しなければならない。坂本信幸氏に詳しい分析があるが[6]、この「望」とは国見歌に付けられる題詞にある「望」と同じ表記だからである。坂本信幸氏は、「望」とある題詞９例を掲げられて、当該歌は「舒明の国見歌と構成上類似しており国見歌の系譜に連なる歌」であると指摘されている。舒明天皇の国見歌とは以下のような歌である。

　　高市岡本宮御宇天皇代　息長足日廣額天皇
　　天皇登香具山望國之時御製歌
　大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　国見をすれば　国原は　煙立ち立つ　海原は　鴎立ち立つ　うまし国ぞ　蜻蛉島　大和の国は　（巻１・２）

坂本氏は、この歌の構成を「土地の提示」、「具体的な国讃詞章の列挙」、「再度土地を挙げて、前段の叙述を理由とした結論としての土地讃美」に分けられる。
同様の方法で、「不盡山歌」も構成を分析すると以下のようになる。
「土地の提示」
天地の　別れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を
「具体的な国讃詞章の列挙」
渡る日の　影も隠らひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくぞ　雪は降りける
「再度土地を挙げて、前段の叙述を理由とした結論としての土地讃美」
語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　富士の高嶺は

坂本氏の構成比較は首肯出来るものであり、舒明歌と同じ構成を持つととらえると、赤人歌は「国見」歌の要素を持つと考えられ、「見れば」構造をしていることに注意しなければならない。国見歌における「見れば」に続く叙述部は実景ではないからである。

5　梶川信行「荒ぶる神の継承」『万葉史の論　山部赤人』 1997.10おうふう　　なお本書では同氏別論「≪富士山」＞の誕生―『望不盡山歌』論のために―）の二篇を合わせて「＜叙景歌＞観の問題点」という章にまとめて掲載されている
6　坂本信幸「赤人の富士の山の歌」『万葉の歌人と作品第』 7巻2001.9和泉書院

⑵ 「国見歌」であるととらえた時の実景描写の幻視

「舒明歌」においては、「国見をすれば」とあるが、これは「国土を見れば」というのと同じく、「見れば」構造であると見なし得る。その叙述部は、

国原は 煙立ち立つ 海原は 鴎立ち立つ

である。国原とは香具山に登って見える大和平野である。従って民家の炊煙を「煙」と表現したととらえられる。しかし海原が意味不明。香具山からは海が見えないからである。そこで香具山麓に当時あった埴安池のことであると考え、鴎は内陸深くまで溯ってくるユリカモメの類であると合理的に考えられてきた。しかし従来は実景を描写した叙景であるという見方から出ておらず、この見方をする限り解釈に無理が生じる。

国見歌における叙景描写部が実景であるかどうかは、次の歌で確認出来る。

おしてるや　難波の崎よ　出で立ちて　我が国見れば　淡島　自凝島　檳榔の島も見ゆ　放つ島見ゆ（仁徳記歌謡53）

この歌は、『古事記』に仁徳天皇の皇后、磐姫の嫉妬を受けて実家の播磨國に逃げ帰った黒姫を慕って仁徳天皇が歌ったとされる歌謡であるが、地の文とは無関係な独立歌謡であると解釈される。そして本来は、八十島祭で海を望んで歌われたものであると考えられている。ここで重要なことは、「見れば」以下の具体的な島の実態が不明なことである。「淡島」は淡路島とも思われる。しかし土橋寛氏が解説されたように[7]「自凝島」は神話でイザナギ、イザナミ二神の降り立った国生みの島であり、「檳榔の島」は文字通り檳榔が生えている亜熱帯の島と見なければならない。となるとこの歌は実景を見ているという解釈は不可能であり、国見における形式的対象を「見る」として神話の島を提示する時間軸と統治の最果ての島という横軸とを織り交ぜて国土讃美を表現していると考えなければならない。

とすると、舒明天皇の歌も同様であり、「海原」は実景ではなく、「国原」と「海原」とを対にして、国土を表現していると考えなければならない。従って「見れば」が国見表現であると見る限り、実景が描写されているのではなく、土橋寛氏が具体的に論じられ、今や定説化していると言える「幻視」[8]の中で、情景が描かれているということになる。ちなみに「国原」に立つ「煙」は炊煙を指すばかりでなく、霧などの水象、また「海原」の「鴎」は海の生命の象徴として、全体が躍動して繁栄する国の象徴として掲げられていると見なければならない。

⑶ 赤人「不盡山歌」における風景描写部の性格

このように見てくると、赤人「不盡山歌」においても、「具体的な国讃め詞章の列挙」は、実景ではないということになる。風景描写部分の「照る月の　光も見えず」「白雲も　い行きはばかり」「時じくぞ　雪は降りける」は、実際に起こり得ることであり、実景とも見られるが、「渡る日の　影も隠らひ　」は、作者の位置が富士山の南であるとすると、太陽は背後にあり、物理的に整合しない。従ってこれらが実景描写ではないという概念を基本として、従来指摘されてきているように[9]、漢詩文の表現を利用した「神性讃美」表現であると言える。ここでは

---

[7] 土橋寛『古代歌謡全注釈　古事記篇』1972.1　角川書店　なお氏は当該赤人歌においてもいったんは叙景歌とされながらも、見直しが必要と解説されている

[8] 土橋寛「国見歌とその展開」『古代歌謡の儀礼と研究』1965.12岩波書店）「国見的幻視」（「幻視」という言葉は増田勝美氏が用いられ（『火山列島の思想』1968.7　筑摩書房）、最近の舒明天皇の２番歌の多くの論考、注釈書は、景叙述部は儀礼的表現であり実景描写ではないという考えに従っている

[9] 吉村誠「山岳讃美表現の性格」『大伴家持と奈良朝和歌』おうふう　2002.9

詳しい内容は触れないが、『万葉集』に影響を与えた『文選』や『藝文類聚』に類似の表現を掲げることが出来、漢詩文における山岳讃美表現を利用した体裁を有している。

ここにおいて「叙景」という言葉が従来使われて解説されてきたことに疑問が生じる。風景を描写するという意味では「叙景」ではあるが、誤解しやすいのは「実景描写」という言葉との関係である。その意味では、この表現は叙景という概念の中に入り得るが実景描写ではない。しかも国見表現によって幻視という風景描写によって構成されているとすると、狭義の叙景という意味でも叙景とは呼べないということになる。

また「国見歌」表現であるととらえた場合、風景描写は一回性のものではなく、対象を讃美するという意図のもとに、象徴的な風景が表現されるという点でも、目の前にある風景を見た感動を表現するという単純な創作活動とはならない。

⑷ 「富士山」の神性讃美表現

次にとらえなければならないのは、「富士の高嶺」の描かれ方である。五味智英氏が詳しく分析されているが[10]、それをなぞりながら以下に再論する。

「天地の　別れし時ゆ」は天地開闢の時を言い、悠久の太古を示す。そこには『古事記』や『日本書紀』に描かれる天地開闢と同じ概念があると見なければならない。記紀で描く天地開闢はその直後に神の誕生へと続く。特に『古事記』は「天地初めて開くる時、高天原に成りませる神の御名は」として、天地開闢の時に「高天原」が既に存在していることを示している。従って「不盡山歌」は「神さびて」という表現になる。「神さびて」という表現は、単に太古の昔から存在した神々しさを言うのではなく、神として存在していることを言う。天地開闢時に誕生した神として現在も存在しているということである。その概念が「高く貴い」である。「高く」も標高が高いだけではなく、「立派な」意味であり、「貴い」は緒論指摘するように漢詩文の概念であると認められるが、神として畏敬すべき尊大さを言っている。神として存在するので、現実のものではなく、神々のいる異界に存在するものとして、「天の原　振り放け見れば」と「見る」行動が描写される。「天の原振り放け見る」の表現については、尾崎暢殃氏に神話的発想と切り離して考えるべきであるという論があるが[11]、内容を「不盡山」歌に合わせて再論してみる。

⑸ 「天の原　振り放け見れば」における対象の性格

「天の原」は、『万葉集』中赤人「不盡山」歌も含めて16例ある。それらのものは、前後の文脈から「異界としての呪的意味」と「天空としての対象」を示すものとの大きく二通りに分けることが出来る。それらを掲げると

異界としての呪的表現

①天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり（巻２・147）

②（前略）すめろきの 敷きます国と 天の原 岩戸を開き 神上り 上りいましぬ（後略）（巻２・167）

③ひさかたの 天の原より 生れ来る 神の命（後略）（巻３・379）

④（前略）天の原 振り放け見つつ 玉たすき 懸けて偲はな 畏くあれども（巻13・3324）

10　五味智英「赤人の不尽の歌」『万葉集の作家と作品』岩波書店1982.11

11　尾崎暢殃「御寿は長く」『万葉考説』笠間書院1977.9

①は、天智天皇が危篤に陥った時に倭太后が詠んだ歌で、意味が理解しにくい言葉であるが、長命を願うために寿ぎの呪詞的な言葉を連ねたものである。ここに人智では及ばない寿命への言及を異界の現象として取り上げることにより、寿ぎが成立していると言える。②は、柿本人麻呂の草壁皇子殯宮挽歌であり、崩御のことを言った部分である。天皇霊が祖神のいる高天原の岩戸を開くという意味で用いられている。③は、「大伴坂上郎女祭神歌」と題詞にある長歌の冒頭部分で、祖先霊の降臨してくる場所を指している。④は挽歌とあるだけで具体的なことは不明であるが、藤原時代の制作になるものである。死者を追悼する様子を、死者の赴いた世界を見ることによって偲ぶという表現に「天の原」が用いられている。

このように見ると、これらの用例は、いずれも「見る」対象が現実世界には存在しない神話的概念の中で用いられていると特徴付けることが出来る。

一方で、天空としての実景として用いられるのは、

⑤天の原振り放け見れば白真弓張りて懸けたり夜道はよけむ（巻３・289）
⑥山の端のささら愛壮士天の原門渡る光見らくしよしも（巻６・983）
⑥天の原雲なき宵にぬばたまの夜渡る月の入らまく惜しも（巻９・1712）
⑦天の原行きて射てむと白真弓引きて隠れる月人壮士（巻10・2051）
⑧天の原降り放け見れば天の川霧立ちわたる君は来ぬらし（巻10・2068）
⑨我が背子は 待てど来まさず 天の原 振り放け見れば ぬばたまの 夜も更けにけり（後略）（巻13・3280）
⑩天の原富士の柴山この暗の時ゆつりなば逢はずかもあらむ（巻14・3355）
⑪天の原振り放け見れば夜ぞ更けにけるよしゑやしひとり寝る夜は明けば明けぬとも（巻15・3662）
⑫（前略）天の原 振り放け見つつ 言ひ継ぎにすれ（巻18・4125）
⑬（前略）天の原 振り放け見れば 照る月も 満ち欠けしけり（後略）（巻19・4160）

⑤⑥⑦⑧は、具体的には月を描写したものであり、厳密に言うと天上の異界の神秘性を表現するために使用したとも思えるが、観念的な対象ではなく、実際に日常的に目に見える天空を神話的に言ったものである。⑨は来訪を待つ趣の歌であり、死者を待つのか恋人を待つのか不明であるが、「天の原」の直接意味する所は、夜更けを言うので、夜空を仰ぎ見る意味として解釈出来る。同様なものが⑪である。また⑩は東歌であり、富士を仰ぎ見る意味で「天の原」が枕詞となっているものである。この場合「富士」を異界のものとしての見方で冠せられているのか、常套的枕詞として使用しているのかは不明であるが、赤人歌とは異なり、日常仰ぎ見る富士山に対する枕詞的使用であると解せられる。⑫は七夕歌であり、夜空のことを指している。また⑬は、無常を主題とした大伴家持の歌であり、天空の月を指す。これらの例は、一方で、神話的な異空間概念を持つとも考えられるが、上記の「異界としての呪的表現」の例と異なることは、具体的な事象が対象となっている点である。

赤人「不盡山」歌の「天の原」も具体的な「富士山」を対象としている点で「天空としての実景」とも言えるが、その富士山の形容が天地開闢以来生成した神としての位置を持つ概念で語られているので、異界の呪的表現としての位置を持つととらえられる。

そして最後に「語り継ぎ　言い継ぎ　行かむ」という言葉で締めくくられる。もちろん「富士の高嶺」を将来にわたって伝えていくという意志を述べたものであるが、赤人は、他にも「我れも見つ人にも告げむ」（「過勝鹿真間娘子墓時山部宿祢赤人作歌一首」３・432）と言っており、将来への伝承を表明することによって対象を讃美し、鎮魂性を持たせている性格の表現として

位置づけられる。

⑹ 反歌の非独立性と表現

反歌については、「田子の浦ゆ」とあるので、作歌場所が論議されてきた。澤瀉久孝氏は『万葉集注釋』において、東海道を東行していたとすると薩多峠から富士山が見え始めるので、この場所であると説いた。現在でもその考え方に従う向きがあるが、高野正美氏は、興津あたりから田子の浦を船行している時の歌であるととらえる[12]。自分自身もかつて富士川渡河の折に、当時存在した浮島沼や須津沼を避けて、三嶋あたりまで船行した時のものであると意見を述べたことがある[13]。ただいずれにしても、行旅の場所は今更水掛け論であり、重要なことは、歌の形態である。ここにも「見れば」が用いられているからである。

鈴木日出男氏は、赤人の視点に導かれた景の描写であるとして、叙景というとらえ方に疑問を呈されながらも、「うち出でて見れば」は「叙景を強力に支える遠近法を構成している」とされる[14]。

しかしこの「見れば」は長歌の「振りさけ見れば」と同じく、国見表現の延長にあると考えられる。従って反歌の「見れば」は長歌の「振り放け見れば」と同一概念であり、独立させることは出来ない。

反歌を独立して見ることは『新古今集』などのように後世になって見られる形であり、近代におけるアララギ派の短歌論の中で「叙景」歌としての解釈が強くなったために一首で完結した解釈が行われるようになったが、従来多く様々な角度から論じられてきたように叙景歌との問題とも関わり、ここは長歌に対する反歌として従属した歌としてとらえなければならない歌であろう。

「見れば」表現は、万葉集中131例を数える。国見表現については既述したが、その後に続く語は情景が描写されており、次第に叙景性が強くなってくる。特に羇旅においては、土地讃美の目的があるので、風景描写が重要な内容となってくる。しかし注意しなければならないのは、対象が叙景性を持つ前の過渡的な時期の表現であるということである。

長歌は虚構表現であることを述べたが、反歌においても同様に考えなければならない。一見風景を描写しているように見える内容であるが、これは讃美目的の虚構表現である。従って叙景歌であるとはみなされない。讃美表現としての虚構性の中心は、「雪」である。「富士の高嶺」は、人間界に存在するものではなく、神の住む「異界」であることは長歌で述べた。「雪」もまた同様である。

⑺ 「雪」の観念

「雪」は万葉集中に152例あるが、その中で次の歌に注目される。

大殿の　この廻りの　雪な踏みそね　しばしばも　降らぬ雪ぞ　山のみに　降りし雪ぞ　ゆめ寄るな　人やな踏みそね　雪は（巻19・4227）

反歌一首

ありつつも見したまはむぞ大殿のこの廻りの雪な踏みそね（同・4228）

12　高野正美「古代の田子の浦」『万葉集の環境と生活』笠間書院　2009.9
13　吉村誠　前掲論文
14　鈴木日出男「不尽山の歌」『万葉集を学ぶ』第三集　有斐閣　1978.3）

宮中に雪が降った時の様子を歌ったものであるが、ここで「山のみに　降りし雪」と歌っている。「山」は「里」と対応し、人間世界の里ではなく、異界としての「山」であることを言ったものであると理解出来る。とすると「雪」は異界のものであり、神々の世界のものであるという観念がある。そしてこの長歌の「時じくぞ」という季節外れの降雪表現も異界の富士山への神性概念の中で讃美表現としてあると理解出来よう。

ただし早く尾崎暢殃氏が指摘されているように[15]「雪」は豊穣予祝のものであり、大雪は豊穣をもたらす吉兆であるという観念もあるが、菅野雅雄氏が述べておられるように[16]、この雪は冬に降る通常の雪であり、今の富士山の「時じくぞ」の雪とは同一概念では語れないであろう。

さて、これらの表現を持った富士山を詠んだ歌は讃美表現で示されていることを見てきたが、最後に何故讃美されるのかを見ていかなければならない。このことを考える時に重要な要素となるのは、これが羈旅歌であるということである。赤人が何らかの事情で東海道を旅している時に歌ったものであることは自明のことである。となると羈旅歌の性格を考えなければならない。具体的な証明は省略するが、羈旅歌の性格として、一般的に「土地讃美」と「望郷」の性格が認められる。ただ羈旅歌の土地讃美としても、神性概念にまで高めた富士山の讃美性は異常である。

⑻　題詞「不盡山」の表記に見る永遠性への讃美

題詞「不盡山」の表記に注目される。富士山の原文表記が「不盡」とあることに注意しなければならない。現代表記である「富士」は万葉集では一例もないからである。梶川信行氏は、そこに富士山の永遠性の含まれていることを認め、また現代の富士山とは必らずしも形状が一致していたかどうか疑わしいと論じる[17]。

当時の富士山は、次に配列されている高橋虫麻呂歌（巻３・319～21）や、

　我妹子に逢ふよしをなみ駿河なる富士の高嶺の燃えつつかあらむ（巻11・2695）

とあるように噴火しており、そこから梶川氏が説くように畏怖や神聖的なものとしての概念があったことは確認出来る。しかし当該赤人歌に畏怖感があったかどうかは、菅野雅雄氏が梶川氏の論に対して反論されたように[18]赤人歌からは伺うことは出来ないが、用字の中に永遠性を予祝する概念があったことは否定出来ない。『本朝文粋』に都良香の「富士山記」があり、現在と同じ「富士山」という表記が用いられている。また『竹取物語』最終部分で、「不死」の観念があり、永遠性への観念が見られる。このことは「天地の分かれし時ゆ」から始まり「語り継ぎ　言い継ぎ行かむ」と讃美する長歌の過去から未来へという時間軸による讃美とつながっていると見られる。

以上、山部赤人「富士山歌」をめぐる研究の現状を解説してきた。ここで大きく言えることは、この歌は一回性の属目詠ではなく、儀礼歌に属する性格を有しているものであり、従って

15　尾崎暢男「大宮の雪」『大伴家持論攷』笠間書院1975.９

16　菅野雅雄「不尽の雪―梶川信行氏の論文を読んでー」『美夫君志』41号1990.12

17　梶川信行 前掲論文

18　菅野雅雄 前掲論文　　なおこれを契機として梶川氏との間に『美夫君志』誌上で論争が繰り広げられた。梶川「赤人の『望不尽山歌をどう論ずるか』『美夫君志』42号　1991.３、菅野雅雄「『不尽の雪再考』『美夫君志』43号1991.10

情景描写部は、様式的な景物表現となっていること、「讃美」という目的のもとに景物が読み込まれていることの２点が「叙景」という表現の性格とは異なるということである。

まだここには噴煙を上げる描写がないことや発表の場の問題など多くの疑問点が残されている。従ってまだ十分現在の研究を網羅したとは言えないが、この歌を理解していく上での本質は上記項目に絞られるであろう。

三　大学における演習授業の紹介と教師教育としての教材化

筆者が実施している「国文学演習」授業の方法は、まず対象とする歌についての発表担当グループを決めて、特に内容的な指導は行わず、注釈書や論文を参照して、発表資料を作成させる。発表資料は、対象とする歌本文の他に、「語釈」「口語訳」「問題点」という項目別にしてまとめるように指示している。それを授業で発表して、質疑応答時間を設けている。すべてパソコン端末で行い、資料は電子媒体の形で発表者によって事前に授業メーリングリストを通して受講生に配布されている。

受講生にとって対象が『万葉集』という普段なじみのない古典文学作品だけに、質疑はあまり活発であるとは言えない。そこで、独自の電子掲示板を作成して、出席確認をすることも兼ねて発表者以外全員に質問、意見、感想等の記入を義務付け、授業終了後に発表者が回答を記入するようにしている。

当初は、掲示板データは、テキストファイルで記録し、独自サーバを用いていたが、現在ではメディア基盤センターのサーバを用い、アプリケーションデータベースである PostgreSQL を用いて、データ保存を行っている。独自サーバのデータは現在失われているが、現在の形に移行した過去３年間のデータは保存されている。そこで、過去のデータを参照しながら、演習授業ではどこが問題となり、また指導結果どのような理解度があったかを分析してみる。

以下に2010年度から2013年度までの基調発表とそれに対する質問や意見と対応させて、要素別に列挙する。

⑴ 「天地の別れし時ゆ」の解釈

発表資料

・「天地の分かれし時」もただ単に「世界の始まり」を意味していただけではなく、「神が生まれた時」という意味も含まれていたと考えることができる。（2011年度資料）

・天地が分かれて世界ができたという神話からの表現（2013年度資料）

とあり、天地開闢の概念を神生誕概念につなぐことにより、さらに深い理解につなごうとしている。しかし現代語訳では、「神さびて」にそのまま続けて、どの年度の資料にも「神々しく高く貴い」とあるだけで、注釈書の一般的な意味理解にとどまっており、神性概念を反映したものにつないでいない。

⑵ 「い行きはばかり」の解釈

発表資料

・富士の霊威に阻まれて進めないでいる（2013年度資料）

とあり、富士山の神霊的解釈への理解が見られる。

⑶　全体的な歌の意味付けとして、讃美表現と叙景性の問題。

発表資料

・古代では、理屈抜きに、景を対句仕立てに並べ挙げるのが、物をほめる方法

・これは、富士という「山をほめるうた」(2013年度資料)

とあり、山讃め歌としての理解が見られる。

そして、それらの感想としては、７件見られる。

感想

・山や雪があるところに神様がいると思っていて、国をほめる歌が詠まれていた

・田子の浦…の歌が実景を忠実に呼んだものではないということに驚きました。

⑷　歌の詠まれた場所

これは一時期盛んに論議されたものであり、注釈書には必ず記載されている。これは、薩多峠説、興津よりの船行説等が紹介されている。また時代背景、作者山部赤人の説明等がなされている。

「ゆ」の文法的意味解釈も含んで、詠歌場所についての感想が２件見られる。

⑸　旅の目的と富士山詠の関係への説明

発表資料

・このように雄大な自然や神聖な場所を題材に歌を読むのは、旅の道のりの安全を願ってのことと考えられる。(1913年度資料)

のように、詠まれた理由は「旅の安全」という言及が見られる。

⑹　反歌の独立性

そこから反歌をどのように見るかということにつないでいる。少し長くなるがそのまま引用する。

発表資料

この「反歌を単独の短歌として見る」考え方と「長歌反歌を切り離さず、関連付けて見る」考え方のうち、我々は後者の考え方を支持する。その理由として、長歌では『天の原振り放け見れば』という空の広がり見ていることを現すような言葉が使われているのに対し、反歌では『田子の浦ゆうち出でて見れば』という地平の広がりを見ていることを現すような言葉が使われていることから、両者は対立関係の言葉を使用していることがある。

この対立関係の言葉より､この反歌は長歌を意識して詠んでいるのではないかと考えた。長歌を意識して反歌を詠むというのは反歌の詠み方であるし、このように対立関係を作ることで、長歌の補足をし、長歌反歌の関連性を強めていると感じた。また、他の理由として長歌と反歌の両方ともが富士山を見たとき感じたことをもとに詠まれているが、これも長歌と反歌の関連性を強めているのではないかと考えた。(2012年度資料)

このことに対する質問や意見は、５件ある。代表的なものとして１件掲げる。

感想

・長歌は一年のことを表せるが、反歌は一つの時期しか描けないということが興味深かった。

⑺　雪の観念

富士山歌を理解していく上でのキーワードとなるのは「雪」である。従って、各年度に渡って「雪」の概念の考察を指導している。その結果以下のようなまとめが見られる。

発表資料

新しき年のはじめに豊の年しるすとならし雪の降れるは

大殿の この廻りの 雪な踏みそね しばしばも 降らぬ雪ぞ 山のみに 降りし雪ぞ ゆめ寄るな 人やな踏みそね 雪は（巻19・4517）

（右二首歌者三形沙弥承贈左大臣藤原北卿之語作誦之也 聞之傳者笠朝臣子君 復後傳讀者越中國<掾>久米朝臣廣縄是也）

三年春正月一日於因幡國廳賜饗國郡司等之宴歌一首

新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事（巻20・4516）

の三例を掲げて、

・山部赤人は富士山に降り積もる雪に神の存在を意識しつつ二つの和歌を詠んでいたのだろう。（2012年度追加資料）

・雪が神聖なものであり、めでたいものであったことが読み取れる。（1913年度追加資料）

という結論を導きだしている。

この「雪」の観点に関する感想や意見は、全てで９件あり、他に比して最も多い。

感想

・雪という単語がなにかしらの鍵になっているのはわかりました。（2010年度感想）

・雪についての他の歌を見てみたときに、雪の神聖性が見えてくるのは面白いと思いました。（2012年度感想）

またその他として、五七調で読むということがわかったとする感想が２件ある。

・五七調で読むことは、知らなかったし、

・読むときは万葉集は五七調が多いというのも初耳でした。

受講生の参考とする資料は、澤瀉久孝『万葉集注釋』や『万葉集全注』など比較的古い注釈書が多く、最近の注釈や研究書を参照していない。しかし現代の研究水準は、従来の論を踏まえて発展していることを考えると、基礎的な段階は把握していると評価出来る。

ただ特徴的に言えることは、参考とした資料を租借して、理解することが精一杯の作業で、ここから自ら考えるということはない。最終単位レポートに自ら考えた結果を記述しているものもあるが、大概は参考にした注釈書、論文の見解の域から出ていない。この理由としては、『万葉集』全体の文化的視点に対する知識や見識に乏しく、古典教育に共通した問題点が掲げられる。その点、最新の資料の提供と教師側の指導力が必要とされ、また十分な指導時間の確保が望まれる所である。

そうした中で、「雪」に対する観点を投入してさらに考えを深めるとい指導を行うと、⑺の解説に行き着く。上に掲げた菅野雅雄氏の意見のように冬季に当然降る雪と「時じき」時に降る雪との相違は考慮しなければならないが、学習段階として学習者に「神性」讃美につながる理解力が培われることは認められる。そして指導の方法によっては、単位レポート等で、それがこの歌を見る上での全ての要素につながることを理解する到達点を得ていることがわかる。

少なくとも、大学の演習授業においては、使用語句の文脈上の観念とそれによって構築され

た表現の性格、それを通して見た時の讃美性への理解、そこから考えられる作歌の目的への理解は成されていると評価出来る。ただそれが連想的に考えが導き出されるのではなく、資料の解説への理解と整理によってなされているという特徴を指摘出来る。

従って応用力がこのことによってついているかどうかは別の問題としなければならない。古典の場合、受講生の間では調べないとわからない、或いは自分の疑問は既に自明のこととして解明されており、無知をさらけ出すのではないかという危惧感が多く見られる。そのことが質疑が活発にならない一番の原因であると考えられる。

上記掲示板による書き込みも、質問や疑問を提示することは少なく、大半は感想や自分の理解したことが多い。ということは、与えられる知識の租借が精一杯で、自分の考えをそこから引き出したり、横断的につなぐという発想はあまり見られない。

ここに古典教育における難しさがある。教材に対する一定の解釈力と理解力がないとついて行けなくなる傾向があるということである。従って、指導する上での留意点は、これらの知識を如何に理解しやすく解説し、彼らが興味を抱く方向に持っていくかということである。

赤人「不盡山歌」の場合、難しいであろうと思われる要素は、
①富士山を異界のものとして神観念で見ること。
②国見歌構造における観念的な情景描写。
の２点にまとめることが出来る。

そこか理解出来れば、表現性や詠歌目的などへの理解につながる。しかしそれは最上段から「解説」するのではなく、歌の言葉から帰納的に分析する方法に拠らなければ理解していくことは不可能であり、最悪の場合は無批判に事象を記憶してしまおうとする結果になる。

しかし上記の２点は赤人「不盡山歌」をとらえる上での基本事項であり、この教材を中学校で扱うと言っても、現場実践における教材化や指導案を構築していく上での応用力を身に着けるという意味で、教師側は最低限理解しておかなければならないことである。

四　中学校授業における教材化と教育方法

最初に掲げた解説にも記されていた「畏敬」と「叙景」ということを理解させるだけでも、この異質な要素をどのように同時に指導するかは至難のわざである。

まず、指導上払拭しなければならないのは、上にも掲げた解説書や教科書にもある一般的な通念としてある「叙景歌」であるという解釈である。この歌が叙景ではないということは、国見歌構造をしているということから縷々述べてきた。しかし直接解説したのでは難解な解説に陥り、講義型になってしまい、学習者には十分な理解がなされないままかえって興味を削ぐことになってしまう。

また「畏敬」という主題であったとしても、中学校の授業において、上記①②の要素を入れることは、その基礎知識や発達段階による理解度の点で不可能である。しかし表現と実態の関係という文学的表現要素を入れることは可能であろう。これが文学表現を味わうことや言葉の性質の問題を言及することになるからである。

そこで、生徒自らが考える形として、以下のような問いかけが有効ではないであろうか。

①「渡る日の影も隠らひ」は、作者が東海道から富士山を見上げているとすると、あり得る情景か。

富士山の南から作者が見ているとすると、太陽は富士山に隠れることはない。ということは、実景が描写されているとは言えない。

②それでは、この表現はどのような意味を持つか。

富士山の高さや威容を強調したものということになるだろう。

③その目で他の描写を見てみよう。

「照る月の光も見えず」「白雲もい行きはばかり」という表現は実際に見られる光景かも知れない。しかしこのように描写した意図は、富士山の高さや威容を強調する所に目的があったと言える。特に「はばかる」という言葉は単に「出来ない」だけではなく、「避ける」といった富士山に対する敬意が含まれていることを見逃してはならない。

④さらに「時じくぞ雪は降りける」とはどういう意味か。

現代では真夏の富士山に雪が降り積もるという光景はない。昔はあったのか。しかし実際にあったかどうかはともかくとして、冬に降る雪が季節はずれに降り積もっているという姿を描く所に目的がある。それは、やはり富士山の高さや威容を表現しようとしている。

ということは、これらの表現は、いずれも富士山の威容を描こうとしており、実景を見たままかどうかはわからない。

⑤これらの光景が引き出される構図として、「天の原　振り放け見れば」という表現がその前にある。「天の原」とはなんだろうか。

普通に考えると、「天上にある平原」ということになり、実在しないものである。『古事記』には「高天の原」という神々の住む世界が描かれている。これに近い表現である。とするとこれは実際にはあり得ない神々の住む世界を「振り仰いで見る」という意味になる。しかしそこには富士山の風景がある。

この不思議な言葉の組み合わせは何を意味するのか。それは見たものがこの世には実在しない光景を見ているということになる。これはどういう意味だろうか。

⑥富士山は実際に見える。しかしすぐに行くことは出来ないだろう。同じようなもので見えるけれども容易に行くことが出来ないものは何か。

月や星が掲げられる。とすると古代の人たちはそれらをどのように見ていたか。おそらく我々の世界とは異なった神々のいる世界と見ていたのではないか。そうだとすると富士山も我々の住む世界とは異なったものと見ていただろう。

このように見ると、富士山を描く言葉は、対象をありのままに表現しているのではなく、不可思議なものを描き出す言葉で表現されているということが知られる。

このような段階を追えば、言葉と自然描写の関係を知らせることが出来るばかりでなく、富士山の神性を描く（「神性」という言葉を使用することなく）というこの歌の性格を伝えることが出来るであろう。

⑦反歌は本当に富士山を目の前にして歌ったものだろうか。

教科書には、反歌のみを独立させて掲げているものがある。反歌のみを見ると、田子の浦から見上げた富士山の光景であるという理解の方が簡単である。しかし先にも述べたように反歌を独立させてとらえるのは後世の解釈であるので、『万葉集』の歌としては、長歌を補足して教材とすべきである。そうなると絵画と同じように作者が讃美の目的で表現を構成しているということに気がつく。そうすると田子の浦のどこから見たかは問題ではなく、富士山を讃美するにふさわしい場所や位置に田子の浦を指定したという考え方を導き出すことが出来る。

また富士山を実際に見ていない学習者もいるので、あらかじめ写真やビデオでその位置と実景を認識させる必要もある。そして文化としての富士山への認識（富士山信仰）を理解させ（世界文化遺産であること）、讃美表現を文化として読み取らせることも重要である。

表現されている内容が観念的なものであるということは、中学生にとって容易に理解出来ないかも知れない。従ってそれを自覚させるために、これらの指導を行った上で、再度赤人の描く富士山の風景は実景かどうかを主題にして討論させるということも一つの方法である。

もちろん大学生はおろか一般の人も現代では七五調に慣れていて、五七調のリズムに違和感を覚える人が多い。まず十分音読を行い、『万葉集』の五七調のリズムを味わわせることも必要である。

以上のようにこの歌をとらえると、解説書にある田子の浦の場所や歌が読まれた位置などはあまり重要ではない。また羇旅という背景も特に触れる必要もないであろう。授業の主題を讃美表現の性格にしぼって、実景と表現の違いがよく理解出来るようにすることが富士山歌を教材化する上での最も重要なねらいである。

五　まとめ

もちろん現研究段階でも必ずしも「叙景」が否定されたわけではない。まだ「叙景歌」であると認識している研究者も多く存在する。しかし一歩進んだ考察が現在なされていることは事実である。従って指導する教師は常に最先端の研究結果を確認して教材に対する認識を深め、指導に当たっては何をねらいとし、どのような方法で行うかということを常に考える必要がある。当該歌の場合は、大きい主題としては、文学表現と実態の関係であり、富士山に神性を認めていく文化的なとらえ方である。ここに古典本来の教育目的があろう。文化の伝統を富士山に焦点を当てて、どのように古くから見られてきたかの認識を持つことと、それをかなえる根拠となる「言葉」のとらえ方を深めるということにより、古典の持つ意義が醸し出されてくるからである。

今後、研究成果と教育現場とのさらなる密接な融合が望まれる所である。